

高等学校芸術科「音楽」における創作学習の実態調査

— 音楽教諭を対象とした質問紙調査から —

長岡 功 ・ 徳田 旭昭*

本研究は、高等学校芸術科「音楽」における創作学習の実態を調査し、結果の分析を通して多様化した学習形態や教師の創作学習に対する見解を明らかにすることを目的としている。調査に際しては、岡山県内の公立高等学校芸術科（音楽）教諭全員を対象に行い、創作学習に対する教師の考え方、音楽学習全体における創作学習の捉え方に関する項目を設定した。その結果、教師は創作学習において、完成後の作品イメージを先行して伝えていることがわかり、音楽的理論や知識を十分に伝えられていないことが明らかとなった。また、近年のICT機器を活用した取り組みやすい学習内容によって、音楽的理論や知識を取り扱わない傾向が見られ、それに伴って、生徒が創作学習で身につけた事項が、他分野の学習へ活用することが難しい現状であることも明らかとなった。

Keywords：創作学習，高等学校，質問紙調査，編曲，作曲

I. はじめに

(1) 研究の背景

高等学校における音楽教育現場において、創作分野の学習内容はとりわけ多岐にわたっている。学習指導要領（平成30年告示）では、創作学習で身につける事項として「反復、変化、対照、副次的な旋律、和音」といった技能が明記されており¹⁾、編曲、作曲等に関わる事項が多く明記されている。創作学習では、これらの事項を確実に達成していくことが求められるが、にも関わらず、教科書の創作学習の掲載分量は全体のわずか5%であり（安田、河添，2018）、加えて近年では、GIGAスクール構想による一人一台端末の導入が進められている。結果として、創作学習の授業の実態はさらに多様化し、その実態は一層不明瞭になっていると言えるだろう。

創作学習が多様化する中、近年の先行研究においては、いくつかの傾向を捉えることができる。最も代表的な実践の一つに、即興演奏による創作学習がある。Terauchi（2022）は自作のアプリケーションソフトを取り入れた即興演奏による創作学習を行

い、研究成果を発表している。また、安田、河添（2018）においても、打楽器を用いたグループアンサンブルの即興演奏に取り組んでおり、高度な音楽的理論、知識を必要としない取り組みやすさが、現場での成果に繋がっているようである。一方で、これらは先述した音楽的理論、知識を取り入れ、深い学習を行っているとは言い難く、いずれの事例もそれらを活かした学習が課題として指摘されている。

また、ICT機器の導入によって既存のアプリケーションを活用した創作学習も大きな潮流の一つである。Googleが提供する「Song Maker」²⁾や、Appleの「Garage Band」³⁾を活用した実践が報告され、即興演奏による創作学習と同様に、取り組みやすい学習内容が現場の成果に寄与している⁴⁾。

以上から、創作学習においては取り組みやすさという観点が授業における一つの指標となっていることが分かる。実際に生徒、教師ともに創作学習に対して苦手意識が強いことや（国立教育政策研究所，2008）、「創作」が好きと答えた生徒が極めて少ないことから（森本、河添，2014）、そうした観点が

岡山大学学術研究院教育学域 700 - 8530 岡山市北区津島中3 - 1 - 1

*岡山県立岡山操山高等学校 703 - 8573 岡山市中区浜412

Survey of Creative Learning in High School Music Classes: From a Questionnaire Survey of Music Teachers

Isao NAGAOKA and Teruaki TOKUDA*

Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Okayama Sozan Senior High School, 412 Hama, Naka-ku, Okayama 703-8573

重視されるのは自然であるといえよう。一方で、これらの傾向から、現場の教師の見解や意図をさらに深く読み取することはできず、多様化した創作学習の実態を捉えることは難しい。創作学習における教師の見解を明らかにすることは、多様化した学習形態を明確にするだけでなく、他分野との関連、創作分野の位置づけも捉えることができ、音楽学習全体の改善の一助になるのではないだろうか。管見の限りでは創作学習における意識調査も見られるが、それらの調査も、やはり現場の実態を網羅しているとは言い難く、概要的な結果に留まっている⁵⁾。

(2) 研究の目的

本研究の目的は、創作学習の内容が多岐にわたる今日、どのような観点が重要視され、どのような傾向があるのかを明らかにすることである。そのために、岡山県内の公立高等学校芸術科（音楽）教諭全員を対象に、創作学習における質問紙調査を実施した。回収したデータを分析し、高等学校の創作学習において教師がどのようなことについて考え、何を重要視しているのかを明らかにする。このようにすることで、多様化する創作学習の実態を詳細に示すことを目指す。

II. 調査方法

(1) 調査参加者と実施期間

岡山県内の公立高等学校に勤務する芸術科（音楽）教員25名（男性8名、女性17名）、20代から60代以上の教員が調査に参加した。なお、本調査の実施期間は2021年11月12日（金）～12月10日（金）である。回答方法はWeb回答（Google Form）もしくは書面での回答を設定したが、回答者の全員がWeb（Google Form）からの回答を行っている。

(2) 質問紙の構成

回答の構成は（1）創作学習に対する教員の姿勢（2）創作学習において教員自身が必要と考える視点（3）生徒が創作学習に興味をもつために必要な工夫（4）取り組みやすい創作学習において必要な視点、の4観点とし、全28項目の質問内容で構成された。各観点における実際の質問項目を表1（次項）に示す。なお、回答にあたっては、4件法による選択式を原則としているが、一部、記述回答や、多肢選択式回答も含まれている。各観点の設定意図や詳細内容を以下に示す。

(1) 創作学習に対する教員の姿勢

創作学習全体に対する基本的な考え方を調査する観点である。特に、①創作の実践経験の有無、②授業

実践のしやすさ、③創作学習が得意か苦手か、④創作学習の汎用性、⑤創作学習の重要性、以上から回答を求めており、創作学習をどのように考えているかについて調査する。さらに、②授業実践のしやすさ、③創作学習が得意か苦手か、については、選択理由を尋ねるように設定した。

(2) 創作学習において教員自身が必要と考える視点

本観点は、創作学習を実践する際の教師自身が持つ資質、能力について調査するために設定した。創作学習において、生徒側の音楽的理論、知識を必須事項としない傾向にあることは前述した通りであるが、それは教師が持つべき資質においても同様か否かを明らかにする。よって、設定した項目は知識や技能に関する内容がほとんどであり（表1）、各項目に対して「とても必要」から「必要ではない」の5件法で回答を求めた。

(3) 生徒が創作学習に興味をもつために必要な工夫

創作学習が他分野の学習に比べて苦手意識が強いという森本、河添（2014）の論に従い、どのように取り組みやすい学習とするかを詳細に調査する。設定された各項目は、題材設定、学習の接続、音楽的理論、知識等に関する事項である（表1）。多角的に設定された項目から、どのような観点を重要視しているかを検討する。

(4) 取り組みやすい創作学習において必要な視点

本観点はより詳細な授業場面から調査項目を編纂しており、創作学習における取り組みやすさの所在を明確にすることを狙いとしている。本観点においては記述による回答も含まれているが、これらの回収データを前述した他観点と総合して、どのような思考によって授業が構想されているかを明らかにする。

(3) 調査の実施方法

岡山県内の全教員に公用メールで依頼し、回答を求めた。回答にあたっては回答者個人が特定されない方法（無記名）で行い、また、まとめられた調査結果は紙面等で公表される旨を事前に伝え、承認を得ている。なお、調査の実施にあたり倫理的な配慮として、調査への参加は任意であり、参加を拒否することによる不利益は無いこと、また、調査の途中で回答したくない、協力できないと感じた場合には、回答を中止することも可能である旨を説明した。

III. 結果

IIにおいて示した4つの観点到に基づいて、各項目の集計結果を以下に示す。

表1 各設問の項目

<p>(1) 創作に対する教員の姿勢</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これまでに創作分野の授業を実施したことがありますか ・ 音楽科の他分野と比べて、創作分野の授業は実施しやすいと思いますか ・ その理由を教えてください（複数回答可） <ul style="list-style-type: none"> (実施しやすいと回答したとき) <ul style="list-style-type: none"> A. 生徒にとって身近な学習内容であるから B. 他の学習分野と連結しやすいから C. 創作学習に必要な既習事項を生徒が適切に理解しているから D. 比較的自由に教材の準備が行えるから E. その他（記述） (実施しにくいと回答したとき) <ul style="list-style-type: none"> A. 創作学習に必要な知識が生徒に不足しているから B. 授業実践例があまり見られないから C. 他の学習分野に授業時間を割いてしまうから D. 教科書の掲載分量が少ないから E. その他（記述） ・ 創作分野の授業を実施することをどのように考えていますか ・ その理由を教えてください（複数回答可） <ul style="list-style-type: none"> (得意であると回答したとき) <ul style="list-style-type: none"> A. 創作（作曲）が自身の専門分野だから B. 創作を日常から行っているから C. 授業準備がしやすいから D. 指導の方法を明確に獲得しているから E. 創作することが身近な校風だから F. 生徒たちが創作を得意としていて、授業への意欲・関心が高いから G. 評価の観点が明確だから H. その他（記述） (得意ではないと回答したとき) <ul style="list-style-type: none"> A. 創作（作曲）が専門分野ではないから B. 指導の方法がいまひとつ分からないから C. 授業の準備の方法が分からないから D. 割り当て時間が少なく、馴染みがないから E. 生徒が創作表現することを恥ずかしく感じており、指導が困難であるから F. 評価が難しいから G. 授業形態的な観点から、そもそも実施することが難しいから H. その他（記述） ・ 創作分野で獲得した知識は、他の学習分野（歌唱、器楽、鑑賞）に活用できると思いますか ・ 音楽科の4分野（歌唱、器楽、創作、鑑賞）を学習の必要性の観点からそれぞれ順位付けを行った場合どのような順番になりますか。同率順位を含めずに回答してください。また、ここでは各分野の割り当て時間を考慮せず、必要性の観点のみで回答してください。 <p>(2) 創作学習において教員自身が必要だと考える視点（必要性の有無を4件法で調査）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的な音楽的理論、知識 ・ 生徒の作品に対して個別に指導を行う力 ・ 既存の楽曲や既習の楽曲を作曲技法の観点から解説すること ・ 記譜の方法やソルフェージュを指導すること ・ 生徒が創作表現を恥ずかしいものと感じないための授業マネジメント <p>(3) 生徒が創作に興味をもつために必要な工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 創作のテーマが生徒にとって身近なものであること ・ 前時以前の学習内容と何らかの関連をもたせていること ・ 分かりやすく伝えるための教材の工夫 ・ 民族舞踊のリズムや音階など、既存のモチーフを取り入れて創作を行うこと ・ 困難な学習活動（楽譜を書く、ピアノで実演する等）をできる限り含めないこと <p>(4) 取り組みやすい創作学習において必要な視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 創作学習に必要な音楽的理論、知識を伝えること ・ 実際の創作の取り組みを示した作品の例を紹介すること ・ 生徒同士で互いの作品に関して意見を交わすこと ・ 授業者が個別に指導、声かけすること ・ ICT機器・タブレット端末を活用すること ・ 適宜音を出したり、ピアノ等で実演したりして創作を進めること ・ 創作を苦手と感じる生徒に授業の進度を揃えること ・ 創作する範囲をある程度絞ること（旋律のみ、伴奏のみ、のように） ・ 創作分野の学習について、ご意見等がありましたら自由にご記入ください。（自由記述）

(1) 教員の創作に対する姿勢

まず、表1(1) 教員の創作に対する姿勢、における集計結果に注目し、創作学習における基本的な考え方について検討する⁶⁾。図1は、「創作分野を実施しやすいと思いますか」における集計結果をグラフ化したものである。

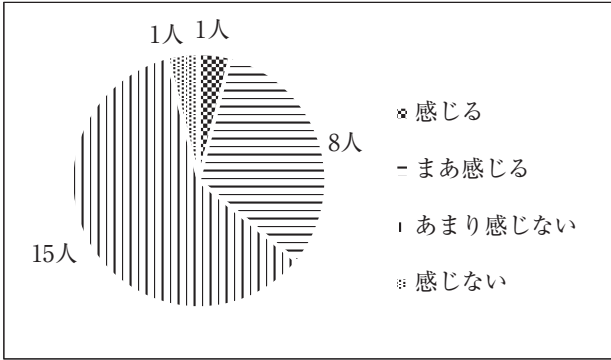


図1 創作分野は実施しやすいと感じますか

図1の集計から、全体の36.0% (9人) の教師が実施しやすいと感じていることが分かる。その理由として最も多かったのは「比較的自由に教材の準備が行えるから」と「他の学習分野と結びやすいから」であり、両者は同数の選択率であった。比較的自由に教材の準備が行える背景として、安田、河添(2018)が述べる教科書の掲載分量の少なさが考えられるが、一方で、昨今のタブレット端末の導入も大きな要因の一つであろう。詳細は後述するが、本調査の自由記述欄において、ICTによる創作アプリケーションソフトの実践報告が多く見られており、事例報告をした教師のうちの40.0%が準備のしやすさを指摘しており、以上の結果に影響していることが分かる。

一方で、実施しやすいと感じない教師は64.0% (16人) であり、創作分野が敬遠されている実態が顕在していることが分かる。その主な理由としては、「創作学習に必要な知識が生徒に不足しているから」が56.2%であり、他にも「他の学習分野に時間を割いてしまうから」が37.5%であった。これらの視点については森本、河添(2014)の調査によって既に明らかにされていたが、教師におけるその主たる原因が生徒の音楽的理論、知識の不足にあることは、本調査にて初めて明らかとなった。

加えて、実施しやすいと回答した教師においても「創作学習に必要な既習事項を生徒が適切に理解しているから」を選択肢として挙げる回答は見られなかった。つまり、教師自身の実施のしやすさの可否

に関わらず、創作学習における生徒の知識が不十分であることは確実であり、いずれの教育現場においても共通していることが分かった。

次に、「創作分野の授業を実施することをどのように考えていますか」という項目について検討する。集計結果は図2の通りである。

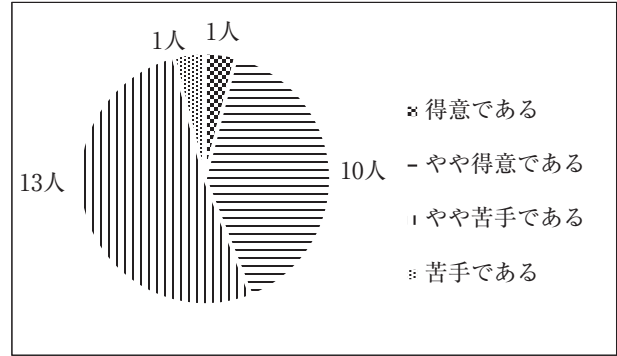


図2 創作分野の授業を実施することをどのように考えていますか

図2に示したように、全体の44.0% (11人) が「得意である」「やや得意である」と回答している。得意とする理由について、最も多かった回答は「創作を日常から行っているから」であったが、一方で、実際の得票数は3票と極めて少なく、本項目からその原因を明らかにすることは難しい。

一方で、「苦手である」「やや苦手である」と回答したのは全体の56.0% (14人) であり、理由として最も顕著であったのは「指導の方法がいまひとつ分からないから」であった。これは、回答中の50.0%の選択率であり、半数の教師が共通の悩みを抱えていたことが分かる。加えて、先述の「得意である」「やや得意である」と回答した教師と比較して、理由を複数選択した教員が多いことに注目したい。「得意」と回答した教師の複数回答率は0.0%であったのに対し、「苦手」と回答した教師は64.3%であったことは興味深い。このことから、創作学習を得意としない教師においては、その原因に複数の要素が混在していることは明らかである。

(2) 創作学習における知識不足の所在

ここでは表1における(2) 創作学習において教員自身が必要だと考える視点、の集計結果を示す。図3は、各項目において、「とても必要」または「ある程度必要」と回答した人数を示し、表2は、アンケートの自由記述に見られた教師の声を抽出したものである。

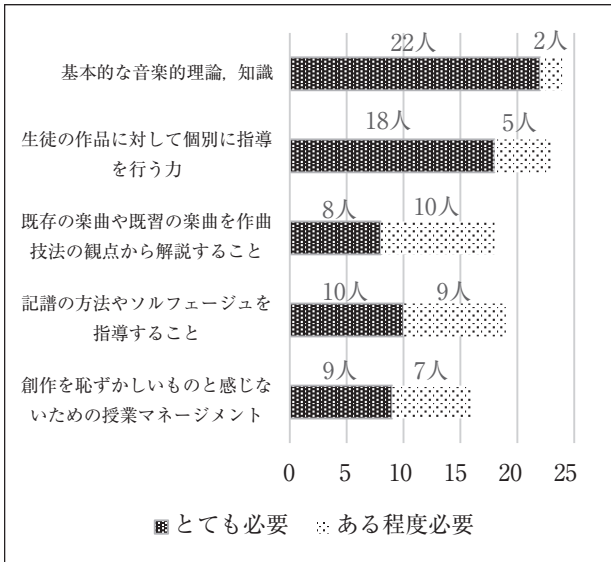


図3 創作学習において教師自身が必要だと考える視点

表2 自由記述における教師の声

・生徒達は、最後の発表をする際は確かに恥ずかしがる姿もありますが、作っている最中はとても夢中になっています。また、発表後も作り上げた達成感に溢れています。なのでこれまで創作表現=恥ずかしいという感覚があまりありませんでした。

・「生徒が創作を恥ずかしいと感じる」という記述がありました。私の経験上（十数年、普通科・実業科）、生徒から創作に対して恥ずかしいという思いは感じられませんでした。むしろ、人前で歌唱したりする活動よりも積極的に興味をもって取り組んでいたように思います。

（原文をそのまま転載）

図3より、教師自身が最も必要だと考えるのは「基本的な音楽的理論、知識」であり96.0%（24人）の選択率である。音楽的知識に関連した項目である「生徒の作品に対して個別に指導をする力」（92.0%、23人）や、「記譜の方法やソルフェージュを指導すること」（76.0%、19人）においても同様に高い選択率であり、創作学習において、基本的知識の重要性を教師が実感しているのは明らかである。

また、安田、河添（2018）の指摘において創作表現に対して、生徒に羞恥心があることが示されていたが、本調査では、「生徒が創作表現を恥ずかしいものと感じないための授業マネジメント」の項目において重要と考える回答率が各項目で最も低い値をとっている。加えて、自由記述（表2）の内容からも、創作に対する生徒の向き合い方は、先行研究と比較して変化していることが明らかとなった。

（3）生徒の興味、関心のための工夫

次に、表1（3）生徒が興味、関心をもって創作

学習を行うために、どの程度必要だと感じますか、という観点における各項目の集計結果を図4に示す。

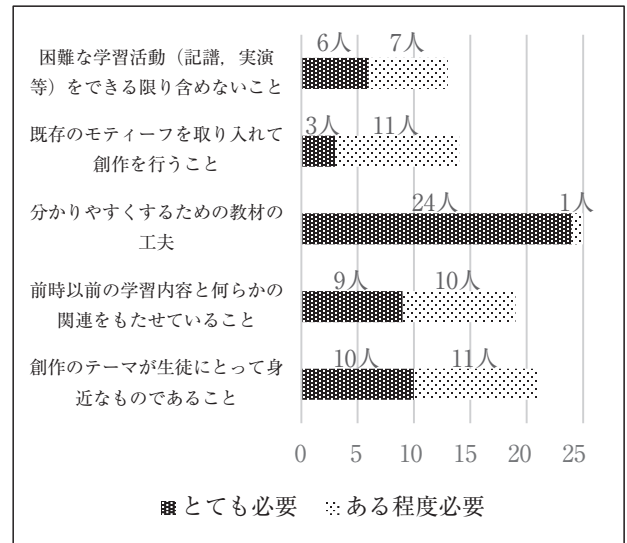


図4 生徒が興味、関心をもって創作学習を行うために、どの程度必要だと感じますか

全ての教師が「とても必要」または「ある程度必要」だと回答したのは「分かりやすくするための教材の工夫」である。また、「創作のテーマが生徒にとって身近なものであること」「前時以前の学習内容と何らかの関連をもたせていること」も高い水準であることをふまえ、生徒の興味、関心をもたせる方法として、分かりやすさ、テーマの親和性、学習の系統性が重要視されていることが明らかとなった。

（4）取り組みやすい学習において必要な事項

表1（4）取り組みやすい創作学習において必要な視点における各項目の集計結果を図5に示す。

回答者の全員が「とても必要」もしくは「ある程度必要」と感じたのは「適宜音を出したり、ピアノ等で実演したりすること」、「実際の作品例を紹介すること」の2項目である。この2項目は、実演や紹介といった内容であり、完成イメージを生徒に伝達する行為を示す。つまり、授業において教師は実際の音響イメージをもたせながら創作を進めることを重要視していることが分かる。

また、これらの項目に次いで重要とされているのは「生徒同士で互いの作品に関して意見を交わすこと」「授業者が個別に指導、声かけをすること」の項目である。これらはいずれも他者からの助言、あるいは自分の意見を伝えて作品を深めていく内容が含まれており、創作分野における「協働的な学び」の視点からも、重視な点であることが言えるだろう。

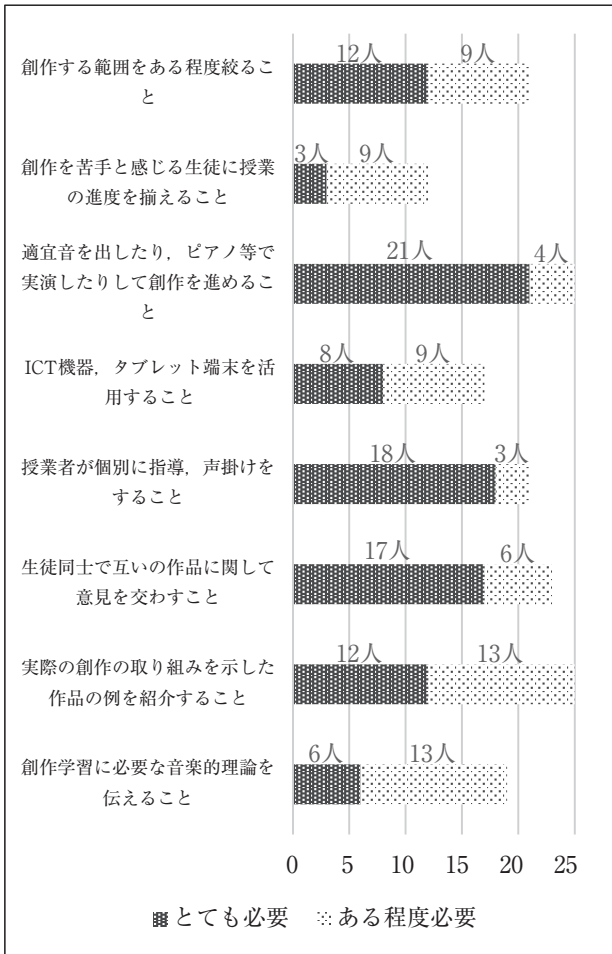


図5 取り組みやすい創作学習において必要な視点

IV 分析と考察

ここでは、これまでの調査で得られた結果をもとに創作学習の実態に関する分析を行う。具体的には、項目同士の関連をさらに深く調査し、得られた傾向について分析し、考察を行う。

(1) 創作学習を得意とする教師の傾向

図2において「創作学習が得意である」と回答した教師のうち、その他の回答との関連から創作学習に対してどのような考え方があるのかを分析した。

これらの教師集団のうち、顕著な回答傾向が見られたのは「ICT機器、タブレット端末を活用すること」の項目である。創作学習が得意と回答した教師のうち81.8%は、この項目の必要性を感じている。「創作学習が苦手である」と回答した教師は同項目が57.1%であったことと比較すると、明確な差であると言える。つまり創作学習を得意とする教師は、ICT機器を活用した授業内容を確立しており、それによって一定の成果があったものと推察される。

(2) 創作分野の授業の実施を苦手とする教師の傾向

図2において「創作分野の授業が得意ではない」

と答えた教師の回答から、その他の回答状況との関連を見てその原因を考察する。

原因の一つに「指導の方法がいまひとつわからないから」が挙げられたことは前述の通りである。この回答者の他の項目を眺めると、教師の音楽的理論、知識の必要性や教材の工夫の必要性を感じていることは全員共通していることが分かる。つまり創作学習が苦手である背景には、教師自身の創作の知識、創作学習における指導力やその方法に関連があると推測される。

また、こうした教師の全員が、後述する図6において音楽学習全体における創作学習の重要性を感じておらず、全員が歌唱もしくは器楽の学習を最も重要であると感じている。言い換えれば、創作分野で効果的な学習効果を得ているとは言い難く、他の学習分野（歌唱、器楽、鑑賞分野）との関連が低い学習となっていると考えられる。

(3) 創作分野における授業実践の実態

図3、2において、基本的な音楽的理論、知識を最も重要とする一方で、創作分野の授業を苦手と感じる教師が多いことから、その原因について深く考察する。「創作学習に必要な音楽的理論、知識を伝えること」(図3)と、「創作分野の授業を得意としない」(表2)の相関について注目すると、相関値は0.32であり⁷⁾、強い相関は見られなかった。これは、教師自身が持つ資質である「音楽的理論や知識、実際の伝達内容」と「得意・不得意」という教師の意識との間に強い関連がないことを示している。また、Ⅲ(4)において前述したように、創作授業においては生徒に作品の完成イメージや具体的な音響について伝えることを重要としているため、音楽的理論や知識を伝えることはさほど重要とされていない。言い換えると、創作分野の授業においては、具体的な創作イメージをもたせることを重要とする傾向にあると言える。完成後の作品の具体的なイメージをもたせはするものの、そこに音楽的理論や知識が同様に加えられているとは言い難いと考えられる。

また、音楽的理論や知識より具体的なイメージが先行する原因について、創作学習についての自由記述に着目した。自由記述欄に回答が見られたのは、全体の44.0% (11回答)であった。11回答中の7回答を以下に示す(表3)。

表3の内容から、ICT機器について触れている記述が多いことが分かる。図1で指摘した内容もあわせて、一般に創作のアプリケーションでは、取り組みやすさに重点がおかれ、生徒が簡単に創作体験が

表3 自由記述欄における回答内容

- ・生徒たちの生活の中にあるツールを活用し、取組むことが、創作指導で指導者として心得ておくことだと思う。
- ・器楽や歌唱はある程度経験した生徒と、全く経験のない生徒との間で、理解の差を大きく感じてしまう。拍数などの問題は楽譜制作ソフトなどを利用することで解決に向かうことがある。
- ・今年度初めて1人1台端末となったことで、生徒がブラウザ上で楽譜を作成できるソフトを探し出し、数名がそのソフトで作成して提出してきた。伴奏をこちらから配信できればより高度な作曲ができるかもしれない。
- ・今年度から一人一台Chromebookを持っており、Chrome Music Labで創作の授業をしてみたら、生徒も楽しく取り組めたようで良かったです。
- ・1人一台端末になり、創作活動の可能性がかなり広がったので今後今までよりも創作の授業は充実してくとおもいます。
- ・端末の導入によってアプリを利用した創作が可能になったため、格段に創作活動が取り組みやすくなり、また、充実した内容が実施可能になった。
- ・大学院時代に自由に創作ということ（理論や記譜に関係なく、気にせず）思い出しました。

(原文をそのまま記載)

できるということが特徴として挙げられる。つまり、創作学習において従来から障壁とされていた音楽的理論や知識がここでは取り除かれており、取り組みやすい創作学習が展開される傾向にある。

また、近年の著名な創作実践研究に目を向けると、即興演奏をはじめとした研究が数多く報告されており⁸⁾、理論や知識の伝達が、同様に障壁として扱われ、取り除かれている。これらのことから、創作分野における授業の傾向として、音楽的理論、知識を取り除いた授業をしている実態がある。

(4) 分かりやすい創作教材の所在

図3において、全ての教師が「分かりやすく伝えるための教材の工夫」における重要性を指摘していたが、実際の工夫の所在について分析する。表1の他項目との相関を調べたところ、「生徒同士で互いの作品に関して意見を交わすこと」にのみ相関が見られた(0.52)。意見交換とは前述したように、協働的学習であり、生徒同士の作品を深めるための工夫であると言える。つまり、分かりやすくするための工夫とは協働的学習、すなわち学習環境であることが分かった。

一方で、本項目との間で、極めて弱い負の相関を示したのは、「既存の楽曲や既習の楽曲を作曲技法の観点から解説すること」(-0.22)である。この項目は音楽的理論、知識に関する項目であり、生徒への伝達行為に関する項目である。相関値は決定的なものではないが、この項目が、「分かりやすい教材の工夫」における課題になると言えるだろう。

(5) 創作分野と他分野接続の観点

表1において、創作分野を実施しやすいと回答した理由に「他の学習分野と連結しやすいから」とい

た回答がみられたことをふまえ、どのような思考に由来するものかを考察する。本項目と各項目において相関が見られたのは、「創作のテーマが生徒にとって身近なものであること」であり、相関値は0.50であった。一方で暫定的な分析ではあるが、「基本的な音楽的理論、知識」との相関値は0.25、「創作学習に必要な音楽的理論、知識を伝えること」との相関値が-0.00であることから、知識に関わる項目との関連が見られないことが明らかであり、創作と他分野との連結の観点として知識面が考慮されていないことが言えるだろう。

(6) 創作分野の授業実践における教員の姿勢と捉え方の傾向

創作分野に対する意識を客観的に捉えるため、下記の調査も実施した。図6は、「音楽科の4分野（歌唱、器楽、創作、鑑賞）を学習の必要性の観点からそれぞれ順位付けを行った場合、どのような順番になりますか」という設問に対する回答結果である。回答にあたっては、同率順位を含めないものとし、かつ、各分野の割り当て時間を考慮せず必要性の観

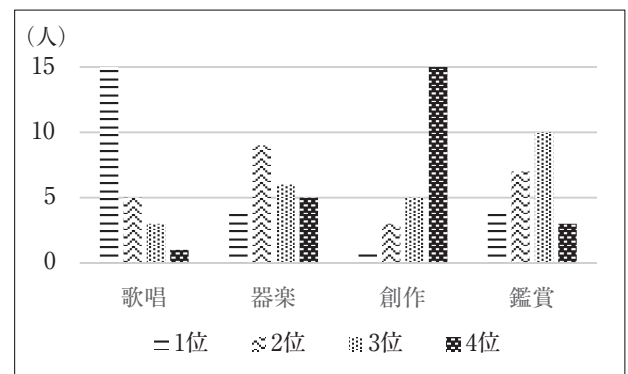


図6 各分野の回答
N = 24 (無効票は含めないものとする)

点のみで回答するよう求めた。

分野ごとの重要性は本来等しいことは前提であるものの、創作分野を4位と回答した教員が極めて多いことは特筆すべきである。創造者としての立場に立ち、音楽的な要素を作り手として検討することができる唯一の分野である創作学習は⁹⁾、自分ごととして音楽的理論知識に触れることが最も可能な分野である。創作学習で得た知見は、生徒が自ら楽譜上の事実を知覚することに大きく寄与することは間違いなく、それは歌唱や器楽、鑑賞に極めて効果的であると言える¹⁰⁾。

こうした事実と、IV(3)で述べた「作品の具体的なイメージをもたせはするものの、そこに音楽的理論や知識が同様に加えられている」とは言い難い」という分析と総合して、本調査においては他教科への接続、学びの連続性としての創作よりも、単元における表現の深まり、生徒の興味の醸成に重点が置かれていることが明らかとなった。

V おわりに

本研究では、多様化した創作学習の実態において、重要とする観点や授業実践の傾向を明らかにするため、高等学校の音楽教諭を対象に質問紙調査を行い、分析を行った。調査結果からは、先行研究と類似した内容もいくらか見られたが、一方で、本研究における新たな結果も見られた。その内容について、特に「教師から生徒への伝達内容」と「創作学習に対する教師の捉え方」の2つの視点から述べる。

教師全体における創作学習の捉え方については、特に生徒への伝達内容においてその傾向が見られた。創作の授業において、教師は「完成のイメージ」をもたせることを重要としており、実際に取り組んだ作品を紹介したり、ピアノ等で音を鳴らしながら実演したりするなどして、生徒にとって取り組みやすい学習となるよう工夫がなされていた。同時に、創作に必要な音楽的理論、知識については、教師自身に身につけておくことは重要としながらも、生徒に伝える際には創作イメージが優先される傾向にあることも分かった。つまり創作学習における伝達内容については、音響イメージが優先され、かつ、音楽的理論や知識がそれに伴わない傾向にあることが明らかとなった。

「創作学習に対する教師の捉え方」については、指導の方法を確立していることが、教師の得意に繋がっていることが分かった。その方法の一つとして、ICT機器を活用した創作アプリケーションの導入が挙げられ、取り組みが容易であることによる学習効果も見られた。一方で苦手意識のある教師について

は「指導方法」以外の原因に、「教師自身の創作に関する知識」、「指導力」が挙げられ、複数の視点が総合して消極的な結果に繋がっていることが明らかになった。

この他にも、創作学習に対する生徒の姿勢については、先行調査とは異なる結果が見られた。創作学習は恥ずかしいものではなく、むしろ興味を持ち、積極的に取り組んでいることが明らかになった。この原因として、創作アプリケーションを通じた取り組みやすい授業内容が導入されたことが挙げられる。音楽的理論、知識が取り除かれた創作アプリケーションは生徒にとって手軽であり、学習上のつまづきを感じにくくしていると言える。一方で、創作学習は創造者としての立場から音楽的理論、知識を学習できる唯一の機会であり、近年の学習傾向によって、こうした機会が確保されているとは言い難い現状も顕在する。今後の創作アプリケーションの使用については、効果的な学習効果の観点から慎重であるべきと言えるだろう。

なお、今回実施した質問紙調査においては、有効な回答結果は25人分であり、十分なデータ量であるとは言い難い。今後は、調査範囲をさらに広げ、本研究結果の妥当性を今一度追求したい。また、音楽教員の専門とする楽器と回答結果の関連等にも着目し、教員自身の音楽的経験との関わりから、回答傾向の分析をさらに深めていきたいと考える。

註

本研究における質問紙調査は、岡山大学大学院教育学研究科研究倫理委員会の承認を得て行われている。

- (1) 本稿では、和声法や対位法といった高次な内容を「音楽的理論」とし、強弱やアーティキュレーション、歴史的背景など、創作に必要な基礎的な内容について「音楽的知識」と設定した。本稿における「音楽的理論、知識」とはそれらをまとめた創作に必要な事項全般を指している。
- (2) Chrome Music Lab (2018) 「Song Maker」
<https://musiclab.chromeexperiments.com>, 最終確認: 2023年9月6日
- (3) Apple (2011) 「Garage Band」
<https://www.apple.com/jp/ios/garageband/>, 最終確認: 2023年9月6日
- (4) Chrome Music Labが提供する「Song Maker」は、音がボタンに視覚化されており、また音域、アーティキュレーション、音色等において機能上の制限が見られる。Appleが提供する「Garage Band」においても、強弱、アーティキュレーション

ンの面において制限があり、音楽的理論、知識が取り除かれた手軽な操作性が特徴の一つであると言える。

- (5) 本文で述べた国立教育政策研究所(2008)や森本, 河添(2014)の研究のほかに, 多賀, 河添(2012)安田, 河添(2018)などにも記述が見られるが, これらはいずれも概要的な調査や, 確認に留まっており, 十分な実態調査であるとは言い難い。
- (6) 「これまでに創作分野の授業を実施したことがありますか」と「創作分野で獲得した知識は, 他の学習分野(歌唱, 器楽, 鑑賞)に活用できると思いますか」の設問に関しては, ほとんど全員が同様の回答をしており, 調査の分析に影響がみられなかったので, 省略する。
- (7) 相関の算出にあたっては, SPSS (IBM社)を用いた。算出された値の基準値は, 「0.00～0.20:ほとんど相関がない」「0.20～0.40:やや相関がある」「0.40～0.70:かなり相関がある」「0.70～1.00:強い相関がある」とする。1に近いほど正の相関(一方が増えればもう一方も増える)であり, -1に近いほど負の相関(一方が増えればもう一方は減る)である。
- (8) 近年の即興演奏における実践は, Terauchi(2022)の実践が挙げられる。即興的な音楽創作によって生徒の興味, 関心は引き出せたものの, 音楽的な強みを引き出せていないことが筆者によって指摘されている。また安田, 河添(2018)の実践においても同様に, 実践を通して音楽的理論, 知識の検討が行われていないことが課題として挙げられている。このように, 即興演奏による創作実践においては, 音楽的理論, 知識が取り除かれることにより, 学習の深まりが見られないことが指摘され続けている。
- (9) 高等学校学習指導要領においては, 以前より「音階, 音型, 反復」と言った具体的な創作の知見が盛り込まれており, 音楽的理論や知識を生かした創作活動が行われるよう指摘されている。学習分野と音楽的知識の関連が最も明記されているのが創作分野であり, 知識の観点において最も他分野

への汎用が期待できる分野であると言える。

- (10) 増田(2021)の「ブロック作曲法」の創作実践において, 対位法の導入的創作を行った生徒が, W.A.モーツァルトのピアノソナタを鑑賞した際に, 対位法的な書法をいち早く知覚したことが, 報告されている。このことから, 創作で体験的に得た音楽的知見は, 他の音楽活動に汎用することが可能なのである。

謝辞

研究にご協力いただいた岡山県内の公立高等学校の先生方に厚く御礼申し上げます。

引用, 参考文献

- Daisuke Terauchi (2022). Improvisation based on audience requests: Pedagogical possibilities of the application “Sanka Play” for performer and audience interaction in elementary school music classes. *International Journal of Music Education*, 40, pp. 419-431.
- 国立教育政策研究所(2008)『特定の課題に関する調査(音楽)調査結果』国立教育政策研究所教育課程研究センター, pp.113-232.
- 多賀秀紀, 河添達也(2012)『高等学校定時制課程芸術科「音楽I」における創作の授業実践—言葉の抑揚を生かした旋律づくりを通して—』教育臨床総合研究11, p.91-106.
- 増田建太(2021)「“ブロック作曲法”を用いた対位法の導入的実践」『音楽教育学』第51巻, pp.1-12.
- 森本菜奈視, 河添達也(2014)『「表現(創作)」と「鑑賞」の一体化をめざした教材開発の実践的研究』島根大学教育臨床総合研究, p. 63-76.
- 文部科学省(2019)『高等学校学習指導要領解説音楽編』教育図書, pp.39-45.
- 安田真梨, 河添達也(2018)「高等学校芸術科音楽における「創作」指導法に関する研究—打楽器を用いた即興的な創作—」『学校教育実践研究』第2, pp.89-92.